

第11回 龍頭が滝案内

松笠と龍頭が滝、そして出雲神楽（その2）

前回は、出雲地域を中心に伝承されてきた神楽のことを「出雲神楽」といい、その特徴は、「七座」「式三番」「神能」の三部構成になっていること、また、明治時代には松笠でも素人神楽が演じられていたことを書きました。今回は、江戸時代に松笠で神楽が舞われていたか、について考えてみたいと思います。

江戸時代の神楽について、現在は一般の方が演じることが多いようですが、江戸時代の神楽の舞手は、神職（宮司さん）でした。また「七座」「式三番」「神能」の三部構成について、江戸時代は「七座」「湯立神事」「神能」という三部構成でした。

この「湯立神事」ですが、湯釜でお湯を沸かし、御神酒、塩をお供えします。そして白の装束に身を包んだ数人の神職が、幣や鈴や剣を手に持ち、その周りを何度も回っては湯釜を祓い清めます（「剣舞」）。それから奉幣、湯祝詞により塩湯と湯立場を祓い清め、御神威をさらに高めます。そして、湯篋をもって湯釜の塩湯を振りまき、神饌、神具、玉串、殿内、祭員、参列者、境内などその場にあるモノとコトすべてを祓い清める（「奉湯」）、という神事です。

さて、ここからは享保2年（1717）に完成したとされる『雲陽誌』の登場です。松笠村の条にはこう書かれています。

松笠

天神社 菅公をまつる 天文年中より寛文まで造立修復の棟札あり 祭礼十月廿五日
なり 此山烏帽子の形なり 故里民烏帽子山という 高さ三十間ばかり横六十間の巖山なり

瀧明神 祭礼十月八日神楽湯立あり

「天神社」というのは松笠天満宮のことです。読んでみると「神楽」という言葉は出てきません。しかし、明治時代には松笠村で素人神楽が行われていましたから、松笠天満宮で江戸時代にも祭礼に神楽が演じられていた、と考えるのが自然でしょう。

次に、龍頭が滝にあった「瀧明神」（瀧神社のこと。）ですが、ここには「神楽湯立あり」と記されています。旧暦10月8日の祭礼には、龍頭が滝の瀧神社で、神楽と湯立神事が行われ、龍頭が滝にあるすべてのモノとコトを祓い清めていたことが確認できるわけです。「神楽」とだけ書かず、わざわざ「神楽湯立あり」と記されていますから、龍頭が滝にとって湯立神事は、とても大事な儀式だったのではないのでしょうか。

今回は、この湯立神事を具体的に紹介したいと思います。